

道徳学習指導案 3

1 主題名 後世に伝えたいこと 3-(2) 自然愛

2 主題について

ひと昔前まで、阿賀野川流域に住む人々は今以上に川と深いかかわりをもち、川の恵みを受けて暮らしていた。盛んだった舟運、食卓に欠かせなかった川魚捕り、薪として利用する流木拾い、生活用水としての利用、川砂利や川砂の採取など、生活と川とのかかわりはとても深い。しかし、工場排水による川の汚染によって厳しい暮らしを余儀なくされた。豊かだった川魚は食べられなくなり、売れなくなった。そして、水銀に侵された体では満足な仕事ができなくなったり、心理的、社会的な差別を受けたりもした。

樋口幸二さんは新潟水俣病の被害者である。樋口幸二さんは新潟水俣病になったことによる苦しい健康状況の中で、また著しい生活の変化の中でも、阿賀野川の自然を守ることを社会に訴え、水俣病の教訓を後世に伝えることを願っている。樋口さんの話を教訓に、被害者の視点から「人々が安心して暮らしていくために、私たちが心がけていかなければならないこと」について考えさせていく。

3 ねらい

新潟水俣病が、自然を壊し、健康を蝕み、生活を変えたことを理解させ、人々が安心して暮らしていくために、自然を畏敬し、社会全体で環境を守ろうとする思いを高める。

4 展開のための視点

『AGA草紙』（阿賀に生きる製作委員会）所収の樋口幸二さんの語り、副読本「未来へ語りついで」（新潟県福祉保健部）の樋口さんの聞き語りを参考に資料を作成した。

阿賀野川流域に住む人々は川の恩恵を受け、自然と調和した豊かな暮らしをずっと続けてきていた。このような生活の実際を、今日のような生活に慣れ親しんだ中学生にイメージさせるのは難しいかもしれない。そこで、新潟水俣病によって突然自然との調和が壊され、それまでの暮らしが一変したことを、それまでの暮らしと対比的にとらえさせる。そうすることで被害の苦しみがいかに大きかったのかを強調したい。

また、樋口さんは昔の暮らしができなくなったことやそのような状況をもたらした原因を恨んで生活しているのではない。樋口さんは二度とこのような悲劇が起きないように、その教訓と環境の大切さを後世に伝えることを自分の使命と感じている。樋口さんの生き方から自分が心がけなくてはならないことを考えさせていく。

5 展開例

○学習活動●学習内容□主な発問	◇指導上の留意点	資料	配時 (分)
<p>○阿賀野川の位置を地図で確認し、写真を見て新潟水俣病はどんな病気だったかを想起する。</p> <p>□ 新潟水俣病が起こった阿賀野川の位置を確認しましょう。また、新潟水俣病はどんな病気でしたか。</p>	<p>◇新潟水俣病の発生時期、場所、原因、症状を確認する。</p>	<p>・補助資料「新潟水俣病紹介写真」</p>	5
<p>●新潟水俣病は公害病である。</p>			
<p>○資料を読み、公害が発生するまでの人々と川とのかかわりが分かるところを発表する。</p>		<p>・資料1「樋口さんの話(1)」</p>	15
<p>□ 人々と阿賀野川とのかかわりが分かるところを発表しましょう。そこから、川と暮らしのどんなことが分かりますか。</p>			
<p>●舟運、漁業、川砂利など人々は阿賀野川の恵みを受けて暮らしていた。</p>	<p>◇人々の生活が阿賀野川と深くかかわっていたことを実感的にとらえさせるために写真資料を活用する。</p>	<p>・補助資料「砂利採取風景」</p>	
<p>○新潟水俣病が発生し、樋口さんが被害者となって悩んだことや思ったことを発表する。</p>		<p>・資料2「樋口さんの話(2)」</p>	10
<p>□ 樋口さんは新潟水俣病の被害者になって、どんなことに悩んだのでしょうか。</p>			
<p>●新潟水俣病によって厳しい暮らしを余儀なくされた。</p> <p>●魚が食べられない、売れない。</p> <p>●体がしびれて仕事ができない。</p> <p>●社会的差別を受けた。</p>	<p>◇発表したことを水俣病の発生前後で対比的にとらえられるように板書を工夫する。</p> <p>◇「社会的な差別」とはどんな差別か具体的に考えさせ、差別への憤りをもたせる。</p>		

○学習活動●学習内容□主な発問	◇指導上の留意点	資料	配時 (分)
○樋口さんが苦しい暮らしの中で分かったことや後世に伝えたいことはどんなことか樋口さんの立場に立って考え話し合う。			10
□ 樋口さんが「分かったこと、後世に伝えたいこと」は何だと思えますか。あなたの考えを発表しましょう。			
●被害者を自分に置き換え、差別や偏見について考える。 ●人間のもつ弱さや醜さ、正しい理解の不足などが差別や偏見を生むことを理解する。	◇「後世に伝える」とは、誰に対して何を伝えるか考えさせる。 ◇苦しみがどう変化していくか具体的に予想させる。		
○資料3を読んで、新潟水俣病の被害にあった教訓を後世に伝えようとする樋口さんから学んだことをシートに書き発表する。		資料3「樋口さんの話(3)」	10
□ 樋口さんの後世に伝えたいことをふまえ、安心して暮らしていくために私たちが心がけていかなければならないことは何ですか。			
●問題に感じたら声に出さなくてはならない。 ●力を合わせて解決を目指すことが大切だ。 ●環境を守り続けなくてはならない。	◇病気、差別に対する憤りを、後世に伝えようとする気持ちに高めていった樋口さんの生き方を学ばせる。		

《評価》

樋口さんが後世に伝えたいこととして、「社会全体で環境を守っていくことの大切さ」をとらえることができたか。(授業での発言、ワークシートの記述)

【資料】

- ・資料1 樋口さんの話(1)
- ・資料2 樋口さんの話(2)
- ・資料3 樋口さんの話(3)
- ・ワークシート 「後世に伝えたいこと」

【補助資料1】

- ・新潟水俣病発生地域の地図
- ・写真「昭和電工鹿瀬工場全景」(『新潟水俣病のあらまし』P.12)
- ・図「生活するうえでの困ったこと」、写真「曲がったまま元にもどらなくなった指」(『未来へ語りついで』P.18)

【補助資料2】

- ・写真「砂利船」「早朝の漁」(『未来へ語りついで』P.14)

板書計画 「後世に伝えたいこと」

<阿賀野川流域地図>

砂利船の写
真

◇ 人々と阿賀野川とのかかわり

- ・ 舟にたよる。
- ・ 川の恵みを受けて暮らす。

新潟水俣病により一変した暮らし。

患者になってどんなことに悩んだか
 仕事後網打つ。→魚が食べられない、売れない。
 自由奔放な仕事。→身体がしびれ仕事ができない。
 のどか。→社会的差別。

厳しい生活

◎どういうことを後世に伝えたいか。

予想

- ・ 暮らしが一変したことへの恨み？
- ・ 悲劇をくり返さないために語りたいたいのではないか。

◎樋口さんが伝えたいこと

- ・ 声を出し、力を合わせて解決を目指すことの大切さ。
- ・ 環境を守り続けることの大切さ。

7 資料

○資料1 樋口さんの話(1)

今のように交通が発達するまで、越後では人も荷物も移動は舟に頼ることがほとんどでした。

阿賀野川は、河川交通の大動脈として大切な役割を果たしてきました。江戸時代、明治時代と時代が進み、田畑の開発が進んでも、阿賀野川の近くに住む人々の中には、農業のかたわら舟運に携わって生活を営んでいる人が見られました。中には、舟運を専らの家業にしている人も多くいました。

昭和の時代になっても、阿賀野川の近くに住む人々は、何かにつけて川とかかわって暮らしてきたと言っても言い過ぎではありません。私はこれまで、長い間砂利取りで暮らしを支えてきました。川砂利が少なくなり、もしも終わってしまうころになってもこの地域はまだ大丈夫・・・、生き続けることができると信じています。というのは、砂利を取り尽しても砂を残してきたからです。「そのうちにこれ(砂)は生きてくるぞ」ということで、砂は大事にしてきました。

川が昔のままであれば、川仕事の後継者がいなくなるなんてことはないはずですが。川での仕事は、会社に入って仕事をするよりはずっと自由奔放(ほんぼう)でした。好きな時に、好きなところに行って勝手に川の生産物をとってこれます。

昔は、本当にのどかだったね。弁当一つとタオル、笠をかぶっていけば、それでちゃんと仕事をして生きられたんです。川の仕事でなくても夕方家に戻ってから網をうって魚獲って来て「おいこれ焼けや」といった具合です。

※『未来へ語りついで』(新潟県)、『AGA草紙』(阿賀に生きる製作委員会)をもとに作成

○資料2 樋口さんの話(2)

新潟水俣病が発生して特に大きく変わったことは、魚が食べられなくなったことです。魚を捕ってきても誰も食べる人がいないし、相手にさえしてくれません。自分も体がしびれてきて魚を捕ることはもちろん、自分たちが立ち上げた砂利取りの会社でも大事な仕事(舟に乗って砂利採取)をすることができなくなってしまいました。自分たちの会社ですのでやめるわけにはいかないし、そうかといって現場の責任者を続けることはできず、しかたなく雑役にまわりました。しびれは本人にしか分かりません。そんなわけで社会的な差別を受けたことも度々ありました。

こんな苦しい暮らしの中で、分かったことがあります。分かったことは後世に伝えたいと考えています。

※『未来へ語りついで』(新潟県)、『AGA草紙』(阿賀に生きる製作委員会)をもとに作成

○資料3 樋口さんの話（3）

健康という財産を失ったことや、偏見の目が向けられたことは言いようのない悲しみでした。でも、長い間かけて身にしみて分かったことがあります。それは「黙っていても解決にはならない。声に出してみよう。そしてみんなで力を合わせて解決していこう。」ということでした。

新潟水俣病の問題は一応決着しましたが、被害者の体のしびれは消えませんし、無念の中で亡くなっていった仲間が頭から離れません。自然の中で生きて、いつもと同じように魚を食べてきただけの人間が、なぜこんな目に遭わなければならないのかと思うと残念でなりません。このような被害を受けるのは私たちだけでもうたくさんです。

二度とこのような悲惨なできごとをくり返さないために、これまでの体験を語りついでいくことが私たちの役割だと信じています。生き証人として訴えていけるのは私たちしかいないのですから・・・。

将来にわたって公害を絶対になくし、環境をずっと守り続けていくことが、子や孫たちのために、そして私を育ててくれた阿賀野川のためにもとても大切だと思う毎日です。

※『未来へ語りついで』（新潟県）、『AGA草紙』（阿賀に生きる製作委員会）をもとに作成

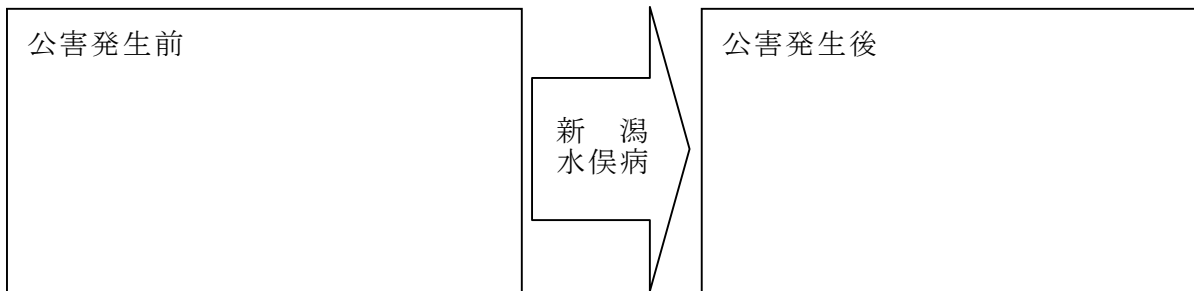
○ワークシート

後世に伝えたいこと

名前 _____

1 新潟水俣病はどんな病気ですか。

2 人々と阿賀野川のかかわりはどう変化したのでしょうか。



3 樋口さんはどういうことを後世に伝えたいのだと思いますか。

<あなたの予想>

<樋口さんが伝えたかったこと>

4 樋口さんが「伝えたいこと」から、私たちが心がけていくことはどんなことだと思いますか。